

# 『十訓抄』の中国故事

## ——帝王にまつわる説話をめぐって——

西 田 禎 元

『十訓抄』は、鎌倉時代の建長4年(1252年)に成立した説話文学で、その名が示すように、小主題別に十段に分けられた、教訓譚<sup>(註1)</sup>282話から構成されている。

序文(総序1、小序10)と跋文をふくむ総数294話のうち、中国の故事を要素にしている小話は60話を超え、全体の約五分の一を占めている。

本稿では、それら多くの中国故事を要素にした説話の中から、三話以上にわたって登場する皇帝や国王をめぐっての説話について、少し考えてみることにしたい。

### I 舜帝をめぐる説話

舜帝は太古の伝説上の帝王であり、いわゆる五帝(司馬遷の『史記』によれば、①黄帝②顓頊③高辛④堯帝⑤舜帝の五人)の一人で、先帝堯の娘たち(娥皇と女英)を妻にして、後継者となった。

舜の継母にあたる後妻に惑うた父親に殺されそうになったが、二人の賢妻によって守護されたことは、『列女伝』(漢代、劉向撰)などでよく知られるところである。<sup>(註2)</sup>

この舜帝をめぐる説話が、『十訓抄』には三話ほど見られる。

(その1) 第三「不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>悔<sub>二</sub>人倫<sub>一</sub>事」第16話

出身が賤しくても才能や人徳によって、帝王や大臣になれるという教訓譚の中で語られている。

胡広(後漢代の宰相)、黄憲(後漢代の有徳の人)、傅説(殷の高宗の賢臣)、呂尚(太公望、周の文王の賢臣)、甯戚(春秋時代の衛の人、斉の桓公の大夫)、顔回(孔子の弟子)、閔子騫(孔子の弟子)らの賢者と並び紹介されている。

虞舜は雷沢の下邑なれども、後には帝位にのぼり(100<sup>(註3)</sup>べ)

この記述は、『史記』の「五帝本紀」をふまえてのものであろうか。『史記』には次のように記されている。

舜耕<sub>二</sub>歴山<sub>一</sub>、漁<sub>二</sub>雷沢<sub>一</sub>、陶<sub>二</sub>河浜<sub>一</sub>、作<sub>二</sub>什器於寿丘<sub>一</sub>、就<sub>二</sub>時於負夏<sub>一</sub>。(『史記』一、52<sup>(註4)</sup>頁)

このような苦勞をしながらも、自分を憎む父や継母に孝養を尽くした。

こうした舜の孝道は世間の評判となり、堯帝が後継者を求めた折に、四岳(堯帝の側近)は辞退し、舜を推挙したのである。

出自は一介の労働者であっても、仕事の才能や人徳によって、有虞舜は帝位についたといえるだろう。

『十訓抄』第三グループの主題は、「人を侮ってはいけない」ということであり、表面的には侮られる対象である、貧しく身分が低くても、その人の才能と徳望によって、立身出世も可能であるということになる。

(その2) 第六「可存忠信・廉直旨事」  
第17話

後漢の光武帝（前5～57年）、王莽（前45～23年、新の帝王）、樊噲（漢の高祖の武将）、予讓（戦国時代の晋の刺客）、潘安仁（晋の文人）、晋の武帝、伯瑜（漢代の孝子）、董永（後漢代の孝子）、郭巨（後漢代の孝子）らの故事と並んで、重華（舜帝）の説話が記されている。

重華は頑なる父につかへ、珀瑜は怒れる母にしたがふ（162ペ）

舜の父親である瞽叟が、後妻の子を愛するあまり、亡き先妻の子である舜を殺そうとしたことについては、前にも記したとおりである。

この小説における「忠信・廉直旨」とは、親に対する正しい、素直な行い、すなわち〈孝の道〉を全うした舜の生き方であろう。

(その3) 第六「可存忠信・廉直旨事」  
第21話

この小説の主人公たちは女性であり、舜帝をめぐると話も、娥皇・女英二人の後にスポッ

トがあてられている。

馬元正の妻尹氏、隱由の妻荀采、石季倫の愛妓緑珠らと並んで、夫や愛人に対する貞節を貫いた、貞女の鑑として語られている。

舜帝の後、娥皇女英は、湘浜にかなしみの色をのこし（167ペ）

『列女伝』などの故事<sup>(注2)</sup>には、夫の舜を助け、夫の両親に仕えた嫁女としての、聡明で貞淑な姿が記されていたが、結局二人は、南方巡察の旅に出た舜の客死のあとを追い、湘水に入水する。「湘浜にかなしみの色をのこし」とは、この故事をふまえた記述である。

『列女伝』では、「母儀伝」に列せられているが、『十訓抄』小話の主題からすれば、むしろ「貞順伝」に列せられるべき女人たちである。

(その4) 第十「可庶幾才能・芸業事」  
第55話

後漢の武王（明帝の誤りか）、虎牙（漢代の武将）、唐の太宗（597～648年）、魏徵（太宗の名臣）、房玄齡（太宗の宰相）らの故事と並んで、舜帝の説話が記されている。

舜帝のとき、八愷・八元と名付て、十六族の文士を選れしが如し（296ペ）

この話は、『史記』「五帝本紀・舜帝」をふまえた記述である。

昔、高陽氏有才子八人。世、得其利、謂之八愷。高辛氏有才子八人。世、謂之八元。此十六族者、世濟其美、不隕其名、至於堯。（中略）舜舉八愷、使主后土、以揆百事、莫不時序。（『史記』一、56頁）

八人の温和で才能のある人物と、八人の善良で才能のある人物を用い、家庭も社会も平和に治めたという。

一芸に秀でること、時に適った才能の力を発揮することの大切さを教訓している小話である。

(その5) 第十「可<sub>レ</sub>庶<sub>二</sub>幾才能・芸業<sub>一</sub>事」  
第67話

嬴玉（秦の穆公の娘）、王喬（秦の霊王の太子）、黄帝（「五帝」の最初に位置づけられる伝説上の帝王）、禹王（夏王朝の始祖、黄帝の玄孫）らと並んで、舜帝の故事が引かれている。

雲調<sub>二</sub>黄徳<sub>一</sub> 軒丘遠、風奏<sub>二</sub>南薫<sub>一</sub> 舜道興  
(307ペ)

大江以言（955～1010年）が作ったという詩句の一節で、瑤琴（美しい琴の音）は治世の音であるという主題を詠じたもののようである。

雲は黄帝の徳を奏で、軒丘に行きわたり、風は情け深い薫りをたちこめ、舜帝の政道を盛んにする、という内容であろうか。

「南薫」が『孔子家語』の次の記述をふまえていることは明らかであろう。

昔者、舜弾<sub>二</sub>五絃之琴<sub>一</sub>、造<sub>二</sub>南風之詩<sub>一</sub>。  
其詩曰、南風之薫兮、可<sub>三</sub>以解<sub>二</sub>吾民之温<sub>一</sub>兮、南風之時兮、可<sub>三</sub>以阜<sub>二</sub>民之財<sub>一</sub>兮。(418頁)<sup>(註5)</sup>

この小話には、管弦の徳が舜帝の政治を盛んにしたという故事をとおして、才芸を身につけるべきことの重要性が説かれている。

## II 紂王をめぐる説話

紂王は殷王朝最後の王で、酒池肉林の故事で有名な悪王の代表的存在である。

(その1) 第二「可<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>僇慢<sub>一</sub>事」第5話

呉王夫差や始皇帝と並んで、僇慢のゆえに滅んだ紂王の故事が記されている。

焚<sub>二</sub>鹿台之宝衣<sub>一</sub>。毀<sub>二</sub>阿房之広殿<sub>一</sub>。  
(84ペ)

『貞観政要』（唐代、呉兢の撰）「君道第一」に記されている魏徴の言を引用した文章であり、故事は『史記』「殷本紀」に見られる。

周武王於<sub>レ</sub>是遂率<sub>二</sub>諸侯<sub>一</sub>伐<sub>レ</sub>紂。(中略)  
紂走入登<sub>二</sub>鹿台<sub>一</sub>、衣<sub>二</sub>其宝玉衣<sub>一</sub>、赴<sub>レ</sub>火而死。(『史記』一、139頁)

殷の紂王が周の武王に故められたとき、紂王が鹿台宮に登り、秘蔵の宝玉の衣を身につけ、火中に身を投じて死んだという。

その鹿台宮と、始皇帝の阿房宮を列挙して、わが主君である唐の太宗は、彼らのような贅沢な宮殿を必要としないと、魏徴は述べるのである。

「可<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>僇慢<sub>一</sub>」という『十訓抄』の教訓に合致した、中国古代の故事といえよう。

(その2) 第三「不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>侮<sub>二</sub>人倫<sub>一</sub>事」第16話

身分賤しくとも、才能と徳望のゆえに、帝位や宰相の位についた人物に対して、夏の桀王や殷の紂王は、天子でありながら、徳行劣れるゆえに、身分賤しき人よりも、人間とし

て劣っているという小話が記されている。

虞舜は雷沢の下邑なれども、後には帝位にのぼり、甯戚は牛口の匹夫たりながら、つゝにくにのまつりごとへのぞむ。桀・紂は天子たりしかども、顔・閔がいやしき身に劣れり（100ペ）

「舜帝」の項でも触れた故事であるが、舜帝が優れた人物の例として語られていたのに対し、紂王は劣った人物の例として紹介されている。同類の桀王は、夏王朝末代の悪王で、殷の湯王に滅ぼされた。

小話の直接の出典は、『貞観政要』「君臣鑒戒第六」であろうか。

朕又聞、桀紂、帝王也。以匹夫比之、則以為辱。顔閔、匹夫也。以帝王比之、則以為榮。<sup>(注6)</sup>

（その3）第五「可撰朋友事」第18話

日本の安康天皇、平城天皇、崇徳上皇ら三天皇と、中国の殷紂王、周幽王の二王を挙げて、朋友（伴侶・后妃）を選ばなかったゆえに、悪政の極みであったという教訓譚である。もろこしの殷紂・周幽王、<sup>(注7)</sup> 妲姫・褒姒とて、二人ながらばけ物にてありけるを、御門さとりしりたまはず、寵愛して、かれがいふまゝにふるまひ給ふあひだ、その国ほろびにけり（141ペ）

殷の紂王は妲姫を、周の幽王は褒姒を寵愛するあまり、彼女たちの言いなりで政治をおろそかにし、国を滅ぼしてしまったというのである。

『史記』「殷本紀」には、次のような記述

が見られる。

〔紂〕好酒淫樂、嬖於婦人、愛妲己、妲己之言是從。（中略）以酒為池、懸肉為林、使男女僕、相逐其間、為長夜之飲。（『史記』一、134～5頁）

悪名高き「酒池肉林」の故事である。

また、同書「周本紀」には、次のような記述が見られる。

三年、幽王嬖愛褒姒。（中略）褒姒不好笑。幽王欲其笑。（中略）有寇至、則举烽火。諸侯悉至。至而無寇。褒姒乃大笑。幽王説之、為数举烽火。其後不信。諸侯亦不至。（中略）幽王举烽火徵兵。兵莫至。遂殺幽王驪山下。（『史記』一、196～9ペ）

人を騙したために、いざというときに、信じてもらえなかった、という教訓譚の要素を併せ持つ有名な話である。

ともあれ、夏の桀王、殷の紂王、周の幽王は、中国古代愚王の代表である。

（その4）第六「可存忠信・廉直旨事」序

主君の悪政を諫めなかった家臣の保身を教訓する小話である。

箕子が紂のこゝろのあしきを知ながら、いつはりたぶれして奴となり（中略）此等は身のためをかまへ、諛へるばかりにて、報国の臣にあらず（143ペ）

箕子は比干や微子と共に殷の三仁といわれている。紂王に人の道を説いたが、聴かれず

して殺されたり、紂王のもとを去った親族である。

『史記』「宋微子世家」に次の記述が見られる。

紂為<sub>レ</sub>淫<sub>レ</sub>佚<sub>レ</sub>。箕子諫不<sub>レ</sub>聽。(中略)乃被<sub>レ</sub>髮佯狂而為<sub>レ</sub>奴。(『史記』五「世家中」、262頁)

『十訓抄』の作者は、「身のためをかまへ」、「諛へるばかり」で、「報国の臣にあらず」と厳しい指摘であるが、比干の生命を賭しての諫言も無意味であったことを思えば、悪しき主君であっても、その人のために、

是彰<sub>レ</sub>君之惡<sub>レ</sub>、而自說<sub>レ</sub>於民<sub>レ</sub>。吾不<sub>レ</sub>忍<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>也。(同上)

として、世間から隠遁した箕子のあり方は、容易には責められまい。

このような箕子であったればこそ、周の武王が教えを請うたのである。<sup>(註8)</sup>

(その5) 第六「可<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>忠信・廉直旨<sub>レ</sub>事」  
第1話

諫言といっても、時機や状況や相手によって同様でない。そうした一例として、伯夷・叔斉の諫言を用いず、紂王を攻めた武王の故事を紹介している。

周武王、殷紂をうたむがために、義兵をあげてかのくにへむかひたまひし時、孤竹のふたりの子、三の理をたてゝ諫をなすといへども、呂望がはからひに付て、終に紂をほろぼす。是は紂の心おごれるによりて、国是をそむく間、天の授、人のあたふる時なれば、子細におよばず  
(144ペ)

天と民衆が授与してくれた「時」を感じ、呂望(太公望)の策に従い、心奪れる紂王を討伐したというのである。

「義兵をあげて」の一句に、この戦いの正当性が明示されている。

ここでも、紂王は悪役であった。

(その6) 第十「可<sub>レ</sub>庶<sub>レ</sub>幾才能・芸業<sub>レ</sub>事」  
第63話

殷の紂王が師蕤に作らせた「北里」という楽曲を、旅の宿で聴いた衛の靈公が感動し、楽官の師涓に採譜させ、晋の平公のもとで披露したところが、平公の楽官をしている師曠が、亡国の曲であるから演奏してはいけないと告げる。

平公は、自分は老齢でもあり、国が滅んでも愁えることはないと言い、ただひたすら、昔の楽曲を聴きたいと願う。

その場に居合わせた人たちは、師曠を除いて皆感動の涙を流したというのである。

『十訓抄』の説話は、主題に添うた「音楽の徳・才芸」を語っているが、典拠と思われる中国の文献には、師曠の指摘が正しかったことが記されている。

『十訓抄』の説話は次のとおりである。

衛靈公と云人、晋の国へゆく道に、濮水と云ところに、やどりたりけるに、(中略)琴を引音あり。師涓と云人を召て、此声を琴のねにうつし給。其後晋平公のもとにおはしつきて、「かゝる物の子をこそうつし侍。」とて、しらぶるに、実に類ひなし。其後、師曠と云人是を聞て、「これは亡国の声なり。昔、師蕤がつく

りし、殷の紂の靡々楽なり。(中略)今の世に不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>調。」と云。其時、平公がいわく、「我は年老、よわひ傾きたり。この後国ほろぶとも、敢て不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>愁。」と、(中略)左右聞者、皆以涙をながす(304ペ)

典拠と思われる中国の故事を次に記す。

『韓非子』(B.C. 3C)「十過」に次のような記述が見られる。

昔者衛靈公将<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>晋、至<sub>レ</sub>濮水之上<sub>レ</sub>。(中略)夜分而聞<sub>下</sub>鼓<sub>上</sub>新声<sub>上</sub>者<sub>上</sub>、而説<sub>レ</sub>之。(中略)子為聽而写<sub>レ</sub>之。師涓曰、諾。(中略)遂去之<sub>レ</sub>晋。晋平公觴<sub>レ</sub>之於施夷之台<sub>上</sub>。酒酣靈公起曰、有<sub>レ</sub>新声<sub>上</sub>、願請以示。平公曰、善。乃召<sub>レ</sub>師涓<sub>上</sub>令<sub>下</sub>座師曠之旁<sub>上</sub>、授<sub>レ</sub>琴鼓<sub>上</sub>之。未<sub>レ</sub>終、師曠撫止<sub>レ</sub>之曰、此亡国之声、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>遂也。

(中略)師曠曰、此師延之所<sub>レ</sub>作、与<sub>レ</sub>紂為<sub>レ</sub>靡靡之樂<sub>上</sub>也。(中略)平公曰、寡人之所<sub>レ</sub>好者音也、願試聽<sub>レ</sub>之。師曠不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已、授<sub>レ</sub>琴而鼓。(中略)平公大説、座者皆喜、平公提<sub>レ</sub>觴而起、為<sub>レ</sub>師曠寿<sub>上</sub>。

ここまでの記述は、『十訓抄』の説話に投影するが、『韓非子』の記事は更に続く。

平公曰、寡人老矣、所<sub>レ</sub>好者音楽、願遂聽<sub>レ</sub>之。師曠不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已<sub>上</sub>而鼓<sub>レ</sub>之。一奏<sub>レ</sub>之、有<sub>レ</sub>玄雲<sub>上</sub>、從<sub>レ</sub>西北方<sub>上</sub>起。再奏<sub>レ</sub>之、大風至、大雨隨<sub>レ</sub>之、裂<sub>レ</sub>帷幕<sub>上</sub>、破俎豆、墮<sub>レ</sub>廊瓦<sub>上</sub>、座者散走。平公恐懼伏<sub>レ</sub>于廊室之間<sub>上</sub>。(中略)平公之身遂瘡病。故曰、不<sub>レ</sub>務<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>治、而好<sub>レ</sub>五音<sub>上</sub>不<sub>レ</sub>已、則窮<sub>レ</sub>身之事也。

『韓非子』の主題は、「十過」の標題が示すように、君主における十種の過誤にある。

政治をおろそかにし、音楽などに夢中になっていると身を滅ぼし、国を亡ぼすという教訓なのである。

ところが、『十訓抄』においては、才芸を身につけることの重要性を説いているのである。

(その7)第十「可<sub>レ</sub>庶<sub>上</sub>幾才能・芸業<sub>上</sub>事」  
第74話

賄賂を拒絶した国司の清廉さに対比された紂王をめぐる小話である。

むかし、殷紂の西伯を捕えたりけるに、大顛・閔夭の輩、善馬以下数のたからを奉りて、ゆりにけり(316ペ)

紂王を非難した西伯(周の文王)を紂王が捕えた折に、西伯の臣下が献上した良馬などの数多の財宝を喜んだ紂王が、西伯を許したという故事がふまえられている。

『史記』「周本紀」の記事を見てみよう。帝紂乃囚<sub>レ</sub>西伯於羑里<sub>上</sub>。閔夭之徒患<sub>レ</sub>之、乃求<sub>レ</sub>有莘氏美女・驪戎之文馬・有熊九駟・他奇怪物<sub>上</sub>、因<sub>レ</sub>殷嬖臣費仲<sub>上</sub>而献<sub>レ</sub>之紂<sub>上</sub>。紂大説曰、此一物足<sub>レ</sub>以积<sub>レ</sub>西伯<sub>上</sub>。

清廉な国司に対比された愚帝紂王の人となりが垣間見られる。

かくして、悪名高き殷の紂王は、この文王の子武王によって滅ぼされるのである。

### III 始皇帝をめぐる説話

始皇帝(前259～前210年)は、全中国を統一した最初の皇帝である。万里の長城の増築や、阿房宮などの造営で知られる、絶大な

る権力者の説話が4話ほど見られる。

(その1) 第一「可<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>心操振舞<sub>一</sub>事」第9話

「五大夫の松」にちなむ報恩譚である。

秦始皇泰山にみゆきなし給ふに、俄に雨にあひ、こまつの木の下に立よりて雨を過したまへり。此故に彼松に位をさづけて五大夫といへり (37ペ)

俄雨から庇護してくれた植物(非情)の松に、五位(五品)の官位を授けたというのである。

出典は『史記』「秦始皇本紀」であろう。

乃遂上<sub>二</sub>泰山<sub>一</sub>、立<sub>レ</sub>石封祠祀。下、風雨暴至。休<sub>二</sub>於樹下<sub>一</sub>。因封<sub>二</sub>其樹<sub>一</sub>為<sub>二</sub>五大夫<sub>一</sub>。

説話文末の教訓は、

かしこきひとは、こゝろなき石木までもかくおもひ知むねをあらはすなり (37ペ)

とある。まさに、「可<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>心操振舞<sub>一</sub>事」である。

(その2) 第一「可<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>心操振舞<sub>一</sub>事」第38話

「心操振舞」の定まらない人物のエピソードが記されており、始皇帝はワキ役である。

昔、秦舞陽が始皇帝を見たてまつりて、色変じ身ふるひたりけるは、逆心をつゝみえざりけるゆへ也 (61ペ)

秦舞陽は戦国時代の昔(前227年)、燕の丹太子の命を受け、刺客の荆軻<sup>(注13)</sup>とともに、始

皇帝に拝謁した人物である。

見<sub>二</sub>燕使者咸陽宮<sub>一</sub>。荆軻奉<sub>二</sub>樊於期頭函<sub>一</sub>、而秦舞陽奉<sub>二</sub>地圖匣<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>次進至<sub>レ</sub>陸。秦舞陽色変振恐。群臣怪<sub>レ</sub>之。(「刺客列伝」<sup>(注14)</sup>)

反逆の心を隠すことができなかつた小心者として記されているが、それは、始皇帝という絶大なる権力者に圧倒されてものであろう。数段前の紹介の条には、

燕国有<sub>二</sub>勇士秦舞陽<sub>一</sub>。年十三殺<sub>レ</sub>人。人不<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>忤視<sub>一</sub>。

と記されていた人物なのだ。

風格の勝負という感がする。

(その3) 第二「可<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>橋慢<sub>一</sub>事」第5話

驕慢な者を退け、質素儉約を旨とすべし、という教訓譚の中に、豪奢を極めた始皇帝の宮殿にまつわる故事が引かれている。

秦始皇の咸陽宮、おごりをきはめ、うるはしきをきはめたりし、あたのためにほろぼされて、子孫につたふることなかりき。(中略)暴秦衰而無<sub>二</sub>虎狼<sub>一</sub>。咸陽宮之煙片々 (84ペ)

贅と美と力の象徴とも見られた咸陽宮が、始皇帝の死後における楚漢の抗争の中で、項羽(前232～前202年)によって焼かれてしまったことを、源順(平安中期の歌人、漢学者)の漢詩などを引用しながら記した小話である。

出典は『史記』であろう。

項羽引<sub>レ</sub>兵西、屠<sub>二</sub>咸陽<sub>一</sub>、殺<sub>二</sub>秦降王子嬰<sub>一</sub>、焼<sub>二</sub>秦宮室<sub>一</sub>。(「項羽本紀」<sup>(注16)</sup>)

説話はこのあと、質素儉約の政治を教訓す

るが、こちらの方の出典は『貞観政要』「君道第一」である。

焚<sub>レ</sub>鹿台之宝衣<sub>一</sub>、毀<sub>レ</sub>阿房之広殿<sub>一</sub>。懼<sub>レ</sub>危亡於峻宇<sub>一</sub>。思<sub>レ</sub>安処於卑宮<sub>一</sub>、則神化潜通、無為而治。徳之上也。<sup>(註17)</sup>

『十訓抄』には、上記の文をそのまま引用し、「貞観政要にかゝれけるこそ、儉約の政あるべきやう、いみじく目出たけれ」(85ペ)と記されている。

#### (その4) 第七「可<sub>レ</sub>専<sub>一</sub>思慮<sub>一</sub>事」

思慮深さを教訓した説話に、反面教師としての始皇帝が登場する。

彼秦始皇帝、高漸離にはかれて、剣にのぞめりけるは、燕の国の図にふけりて、自出相給へる故なり (212ペ)

前述(その2)の説話を、始皇帝側から照射したものであるが、人物関係に誤りがある。「高漸離」は「荆軻」と改めるべきである。高漸離は荆軻の親友であり、荆軻の死後に始皇帝暗殺を図ったが、失敗し殺された人物である。親友の仇討ちの思いも込められた、始皇帝暗殺未遂という共通性が、『十訓抄』編者の筆を誤らせたのであろう。

「剣」と「図」(地図)のキー・ワードは、間違いなく「荆軻」と「秦舞陽」の始皇帝暗殺未遂事件である。

高漸離の名前が出た序でに、彼についての故事を紹介しよう。

刺客の荆軻が燕の国に来て、最初に友となったのが高漸離であった。

荆軻既至<sub>レ</sub>燕、愛<sub>レ</sub>燕之狗屠及善擊<sub>レ</sub>筑者高漸離<sub>一</sub>。荆軻嗜<sub>レ</sub>酒、日与<sub>レ</sub>狗屠及高漸

離<sub>一</sub>飲<sub>レ</sub>於燕市<sub>一</sub>。酒酣以往、高漸離擊<sub>レ</sub>筑、荆軻和而歌<sub>レ</sub>於市中<sub>一</sub>、相楽也。已而相泣、傍若<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>人者<sub>一</sub>。<sup>(註18)</sup>

高漸離は、筑という琴(きん)に似た十三弦の弦楽器の名手で、彼の伴奏で荆軻が歌い楽しむといった交友関係であった。

荆軻たちによる始皇帝暗殺未遂事件の後、丹太子と荆軻ゆかりの者の追跡を始めた始皇帝から逃れるために、高漸離は名前を変え身をひそめていたが、たまたま筑の演奏を耳にしてから、その演奏の未熟さを批評するに至り、雇い主から筑の演奏を所望され、一座の者を感動させた。

高漸離の評判がやがて始皇帝の耳に達し、皇帝に召された席において、高漸離の正体が暴かれてしまった。

始皇帝は高が筑の名手であることを惜しみ、死罪を免じ盲目にして、側近の楽人の一人に据えた。

その後の運命を、『史記』「刺客列伝」は次のように記す。

使<sub>レ</sub>擊<sub>レ</sub>筑、未<sub>レ</sub>嘗不<sub>レ</sub>称<sub>レ</sub>善。稍益近<sub>レ</sub>之。高漸離乃以<sub>レ</sub>鉛置<sub>レ</sub>筑中<sub>一</sub>、復進得<sub>レ</sub>近、举<sub>レ</sub>筑朴<sub>レ</sub>秦皇帝<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>中。於<sub>レ</sub>是遂誅<sub>レ</sub>高漸離<sub>一</sub>、終身不<sub>レ</sub>復近<sub>レ</sub>諸侯之人<sub>一</sub>。<sup>(註19)</sup>

始皇帝の寵愛のもとで筑を演奏していたある日のこと、高は筑の中に鉛を隠し置き、機会を見つけ、筑で始皇帝に打ちかかった。しかし、筑はあたらず、皇帝はやむなく高を処刑した。

王者始皇帝の風格といい、義のために生命を貫いた高漸離といい、歴史のドラマは善悪を超えて感動的である。

『十訓抄』の説話は、敵国の地図に心奪わ

れ、敵国の使者に接見した、始皇帝の心の油断を指摘しているが、権力者の強運のようなものも感じられてならない。

以上、「舜帝」、「紂王」、「始皇帝」の三人の帝王を取り上げ、彼らにまつわる説話と、その背景の故事を垣間見てきたが、概して舜帝は「堯舜の世」に相応しい名君譚を語り、

紂王は「桀紂」の呼称で名高い暴君譚を語り、始皇帝は功罪相半ばする権力者の姿を伝えている。

この始皇帝のありようこそ、古今東西の権力掌握者の実相であるといえよう。

漢代以降の帝王譚については、次号で述べることにしたい。

### 【注】

〈注1〉岩波文庫『十訓抄』（東京大学国文学研究室蔵三巻本、橋本進吉博士蔵本）の形態による。

〈注2〉『『唐物語』の女人群像』（本誌第14号所収）参照。

〈注3〉『十訓抄』本文の引用は、〈注1〉の岩波文庫の本文による。

〈注4〉漢詩文の引用は、特に断らない限り、新釈漢文大系（明治書院）による。

〈注5〉『孔子家語』「弁楽解」

〈注6〉『貞観政要』上、185頁

〈注7〉本文には「姐」とあるが、「妲」の字が正しい。また、「似」も「妲」が正しい。

〈注8〉『史記』五（世家上）「宋微子世家第八」、

264頁

〈注9〉『韓非子』上、104～7頁

〈注10〉同上、107～8頁

〈注11〉『史記』一（本紀）、150頁

〈注12〉同上、329頁

〈注13〉『『源氏物語』と中国の故事』（『日本語日本文学』第2号所収）参照。

〈注14〉『史記』九（列伝二）、439頁

〈注15〉同上、435頁

〈注16〉『史記』二（本紀）、464頁

〈注17〉『貞観政要』上、40頁

〈注18〉『史記』九（列伝二）、418～9頁

〈注19〉同上、445～6頁